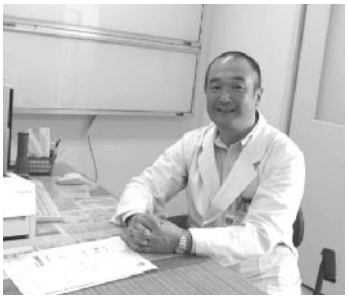
市民病院発

ほのか診察室

問 市民病院　総務課
☎23-7852

シリーズ第8話

認知症について



新城市民病院
医局長　祖父江文男

認知症とは、いったん獲得した知的機能の低下により、社会生活に障害をきたした状態で、他人の介助なしでは社会生活の困難な状態と定義されます。

知的機能とは、記銘力（物を覚える能力）、記憶力（覚えた事柄を保持する能力）、見当識（時、所、人などの見当がつくこと）、計算力（足し算や掛け算などの計算をする能力）、判断力などのことを言います。これらの知的能力が低下した具体的な状態は次のようになります。

【記銘力障害】

「今言った事をすぐに忘れる」「食事をしたばかりなのに忘れてまた食事をしようとする」などで特に目立つ症状です。

【記憶力障害】

生年月日など、昔の事柄を忘れている遠隔記憶障害と、2、3日前などの事柄を忘れている近時記憶障害の2つに分けられますが、認知症では近時記憶障害が特徴的です。

【見当識障害】

「日付がわからない」「自分のいる場所がわからない」「自分の配偶者や子どもがわからない」などで、症状がかなり進んだ状態です。

【計算力障害】

「1たす3」など簡単な暗算などができなくなる状態です。

これらの症状は**「認知症の中核症状」**と呼び、認知症の診断に必須の症状です。これに、自発性の低下、意欲減退、うつ状態、妄想、幻覚、行動異常など周辺症状といわれるさまざまな精神症状があります。

以上のような症状が、いつから、どのように進んできたか、社会生活にどのような障害があるかを問診により総合的に判断し、認知症の診断をします。

認知症を大別すると、脳血管障害型認知症と、アルツハイマー病に分けられますが、両者の混じりあった型も少ないですが存在します。大別した2つの型にはそれぞれ特徴がありますが、鑑別するために必要な検査がMRIと脳血流シンチグラフィーです。MRIでは脳自体の萎縮の程度、脳血管障害の有無を見ます。脳血流シンチグラフィーでは、脳自体の血流の変化を見ます。さらにVSRADという特殊なMRI検査は、脳の海馬という部分の萎縮を測定することで認知症の早期発見、診断の一助となっています。

現在、認知症は治る病気ではありませんが、早期に正しく診断し、その病態、引き起こしている疾患を正しい認識を持って理解すること、さらに医学的に診断をするだけではなく、診断後の適切な介護と福祉が最も大切です。

認知症と診断された患者さんが、その後の人生を少しでも幸福に生活できるような環境づくりをすることが、私たちの勤めだと考えています。

物忘れや異常行動でご心配やご不安があるようでしたら、早めに神経内科専門医をお尋ねください。